

「祝福となるとは：祭司とぞうきん」(2020.1.19)

「祝福の源となるように～ you shall be a blessing ～」(創世記 12:2)

神様からの呼び掛けに応え、アブラハムは示されるまま、地上の故郷には二度と帰らぬ思いで旅を続けた。しかし、彼には握りしめていた神の約束があった。それは「祝福の源となるように」という神の宣言である。英語の表記からもわかるように、この宣言には神ご自身がアブラハムを「祝福の源にする」という決意が込められている。この恵みの約束はやがて、イサク、ヤコブ、そしてイスラエルへと引き継がれ、今日新しいイスラエルであるキリストの教会が受け継いでいる。私達は祝福の源とされているのである。

そこで考えたい。祝福の源であるとはどういうことか。創世記12:3節には「あなたを祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。」とある。どんな時も神が私たちの味方であり、私たちは人が祝福されるか否かのキーマンだ、ということである。大きな恵みであると同時に、よく考えると恐ろしいことである。聖書が私たちに対して誰かを呪ってはならないと繰り返し警告し、逆に祝福し、執り成し祈るようにと勧める理由がここにある。祭司として召されているということである。

イエス様も言われている。「はっきり言うておく。わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける」(マタイ10:42) イエス様は私たちに対してなされたことを自分自身のことのように感じられ、そして私たちに良くしてくれた人々を喜んで祝福されるのである。イエス様の愛に感謝する一方で私たちの責任は重大である。私たちの生き方が問われる。なぜなら、私たちが誰かのために何かを為し、誰かがそれを喜び感謝し、私たちを祝福することによって、その人が神に祝福されるのだから。先日、次の詩を通して教えられた。



「こまった時に思い出され、用がすめば すぐ忘れられる ぞうきん
台所のすみに小さくなり むくいを知らず 朝も夜もよろこんで仕える
ぞうきんになりたい」(河野進)

祝福の源にされているとは、執り成し祈る祭司であると同時に、ぞうきんのように仕える僕として召されているということではないだろうか。